

徳田声秋「縮図」の映画化 監督／新藤兼人 主演／乙羽信子

【第三種郵便物認可】

「縮図」

私の履歴書

新藤兼人

22

「原爆の子」の撮影は順調に進んだ。広島のあるゆる組織、被爆団体が協力してくれた。毎晩のように被爆者たちとの座談会があり、乙羽信子

は鍛えられていった。島へロケに行った帰り、出航直後から雨が降り出し激しくなった。小さな荷役船だから隠れる場所はない。全員が濡れとなって歌を歌った。八月六日に上映するために急いで仕上げた。広島島の福屋デパートの六階にあった映画

館ではドアが閉まらないほど客が詰めかけた。独立配給で全国上映し大ヒットした。

乙羽信子が近代映画協会に入りたいと言ってきた。近代は思想的に自由で、メンバーは吉村公三郎監督、わたし、松竹のプロデューサーだった。糸屋寿雄、東宝にいた山田典吾、俳優の殿山泰司が中心だった。昭和二十五年（一九五〇年）はレッドパーシが吹き荒れた時で、組合活動に手を焼いていた映画会社は、これ幸いと共産党とその同調者を締め出しにかかった。共産党員であった糸屋はそんなことで飛び込んだのである。乙羽信子は今度も永田雅一社長に直談判した。さすがの社長も度重なる乙羽信子のわがままについてバクハツした。

シナリオ、監督の目で

自由思想の近代映画協会

「乙羽君、君と専属契約を結ぶために大枚のカネを投じた。それを君は知っとるかね。君にはまったく呆れたよ。大映を出て行くならそのカネを払わなければいかんのだよ。いくら非常識な君でもその位のことにはわかるだろう。え、なぜ黙っているんだ。そないおとなしい顔して何を考えとるんだ。え、わかった、よろ

村さんは大映との契約が残っていたので「千羽鶴」「欲望」を撮り、これで大映との提携契約は終わった。

わたしは「縮図」に本腰で向かった。シナリオライターの目で映像を捉えようとした。シナリオは映画の根源で



「縮図」の撮影現場で（左から筆者と乙羽信子）

テランの伊藤武夫カメラマンと組んで「縮図」へと移った。伊藤カメラはわたしの求めるものを表現してくれて、わたしは多くのことを教えられた。吉村さんの「夜明け前」はやはり東宝を出た宮島義勇カメラマンが担当した。

一点を凝視して動かないわたしを「シンディ新藤」とスタッフは囁いたがわたしは動じなかった。映画を作ることは、生きるか死ぬかの問題だった。

あり、それをそのまま監督の目で捉えたいと思った。書いて撮る。それこそ監督の仕事であると思った。東宝争議が解決し、多くの技術者がフリーとなった。わたしたちはこれらの技術者と組んだ。「原爆の子」からベ

「縮図」と「夜明け前」は新東宝系で上映され「縮図」はヒットしたが「夜明け前」は興行的に失敗した。東宝争議で分かれた新東宝は当初は勢いを見せたが、次第に配給網が狭まって解散寸前。「原爆の子」のヒットしたカネで「縮図」と「夜明け前」を撮ったが、また無一文になった。（映画監督・脚本家）